

○第61回（令和7年1月22日）評価委員会評価

令和6年度は、6月23日～25日にかけて連携排砂が、6月30日～7月2日、7月30日～8月1日にかけて2回の連携通砂が実施された。

出し平ダムからの排砂量は、目標排砂量約19万m³に対し、約10万m³となり、想定変動範囲の約10万m³～29万m³の範囲内であった。連携通砂では出し平ダムの堆砂量が約16万m³増加した。

宇奈月ダムにおける連携排砂及び連携通砂での土砂変動量は累計で約8万m³の増加であった。

◇環境調査結果について

今回の連携排砂、連携通砂に伴う環境調査の結果から次の知見が得られた。

□水質調査について

- ・連携排砂、連携通砂時の各指標は概ね既往の観測値と同程度であった。

□底質調査について

- ・連携排砂、連携通砂時の各指標は概ね既往の観測値と同程度であった。
- ・9月調査において、海域の一部地点で全リンおよび硫化物が既往最大値を上回った。

□水生生物調査について

- ・水生生物調査で確認された種数・個体数は概ね既往の変動の範囲内であった。
- ・海域の一部地点で、種数・個体数が過去の最小値を下回る値を観測した。

以上の水質、底質および水生生物の環境調査結果をみる限り、一時的な環境の変化はあるものの、連携排砂および連携通砂が周囲の環境に大きな影響を及ぼしたとは考えられない。

◇令和6年度の連携排砂運用について

- ・令和6年度の連携排砂は、当時の流況に対し確実な排砂とできるだけ両ダムの貯水池内の土砂を流下させるため、両ダムの自然流下のタイミングと自然流下時間を合わせた運用を実施した。
- ・効果検証にあたり、令和6年度連携排砂時の流況を用いた排砂シミュレーションにより令和6年度の実績操作と先行操作並びに従来操作との比較を行った。
- ・令和6年度の実績操作は、当時の流況に対し確実な排砂のためコンパクトかつできるだけ両ダムの貯水池内の土砂を流下させることができた。検証結果を総合的に比較すると、実績操作が最もバランスの良い運用であると考えられる。

◇今後の留意点

- ・今後の運用について、先行操作を基本としながら令和6年度の実績運用の様に実際の流況に応じ柔軟に判断するものとし、さらなる運用の高度化に向けて検討すること。
- ・海域の環境については、局所的な変化はあったものの、生物活動の周期的な変化や地震の影響の可能性も考えられることから、調査結果を注視していくこと。
- ・環境の調査については、長期的なトレンドがわかるようにデータを整理すること。

以上